Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2024-11-18

他大学・他研究機関との連携・情報交換（第3章自治体・NGO等との協力による歴史資料の保全・活用事業）

松下，正和
人見，佐知子

(Citation)
歴史文化に基礎をおいた地域社会形成のための自治体等との連携事業,5(平成18年度事業報告書):93-96

(Issue Date)
2007-03-31

(Resource Type)
report part

(Version)
Version of Record

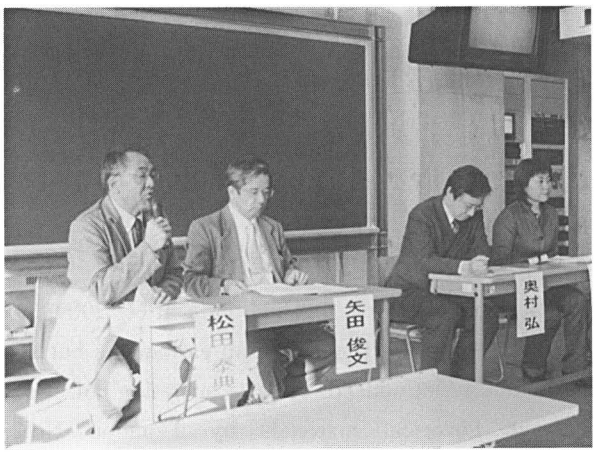
(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81002267

他大学、他研究機関との連携・情報交換

第１回　人と文化遺産の保存継承ミーティング
「地域文化遺産を災害から救出する活動を学ぶ
～文化財保存の日常から非日常までを包括した山形文化遺産保存継承ネットワーク（仮）の構築～ 」

主催：東北芸術工科大学保存修復研究センター
日程：2005年3月25日（土）13:30～17:00
会場：東北芸術工科大学本館207号室

本ミーティングは、災害から山形県内の地域文化遺産の保全と、県内の文化遺産保存継承に必要なネットワークの構築の可能性を見いだすことを目的に開催されたものである。



矢田俊文氏（新潟大学人文学部教授・新潟大学人文学部地域文化連携センター副センター長・新潟歴史資料救済ネットワーク事務局長）、奥村弘氏（神戸大学文学部助教授・歴史資料ネットワーク代表委員）、手代木美穂氏（東北芸術工科大学文化財保存修復研究センター講師）による講演の後、パネルディスカッションが行われた。

通常各地の「資料ネット」は、災害発生後に結成される場合が多い。しかし、この山形では、災害が発生する前段階でネットワーク化をはかる試みが進められている点で、注目すべきである。
また、筆者は被災時における、被災資料の情報収集や保全に関しては、歴史学・考古学・保存科学などの諸分野が協力すべきこと、文書資料の所在確認や被災時の保全について普段から行う必要があること、山形の修復拠点として芸工大に期待したい点などを指摘した。

なお、本ミーティングの詳細については報告書が刊行されている。

（文責・松下正和）

国府台高校修学旅行（校外学習）への協力

2006年11月1日（水）、国府台高校二年生の生徒6人が神戸大学を訪れた。

千葉県市川市の県立国府台高校では、名所旧跡や観光地をめぐるという従来の「修学旅行」を改め、テーマに沿って訪問地の自然・文化・産業・経済・歴史・文化財等について班別調査研究をおこなうことにより社会や地域に学ぶ姿勢を養うこと、および調査に向けた話し合いによって生徒相互の理解や協調性を深め、人間性の向上と連帯感を身につけることなどを目的とした「校外学習」を実施しているという。2006年度は関西方面が訪問地となった。

生徒は班ごとに研究テーマを決め現地での聞き取り調査や体験学習を計画することとなっていたが、そのうちの一班が「開港後の兵庫県の歴史や文化」を調査・研究のテーマと定めた。以上の目的に沿って当初、歴史資料ネットワーク（史料ネット）に直接調査の依頼がきたが、内容や趣旨を検討した結果、神戸大学文学部地域連携センターに協力してほしいということとなり、センターが「聞き取り調査」を受け入れることとなった。開港後の兵庫県について詳しい話を聞きたいということであったので、日本近代史を専攻する人見が担当することとなった。

当日は、「開港後の兵庫と神戸」と題したレジュメと関係資料を用意し、（１）神戸開港と外国

人居留地の建設と、（2）歴史遺産について大きく二つの内容に分けて話をした。

（1）ではまず、地元の高校生ではないため地理感に乏しいであろうことを考慮して、現代の地図をみながら、三宮、元町、生田神社、南京町、旧居留地、生田川、フラワーロード、鯉川筋などのだいたいの位置を把握してもらうようにつとめ、それから、明治初年の兵庫と神戸の地図と見比べてもらった。

次に、歴史の原史料に触れてもらうことを目的に、神戸開港の契機となった、1867年（慶応3）4月13日「兵庫・大坂居留地に関する取極」一二条を、一部音読しながら解説を加えた。

さらに、開港後の神戸の変化について、居留地の建設・運営、雑居地の形成、「南京町」の成立といった市街地の形成や衣食住など生活の変化について、この後実際に現地を訪問する予定にしているという生徒たちに古写真に写る神戸と現在の神戸の違いを体感してもらえるよう、写真資料を多用しながら説明した。

（2）では、神戸大学文学部地域連携センターの活動の趣旨を理解してもらうことを目的に、「地域遺産」や「歴史資料」について話した。国や県や市町村による指定文化財だけでなく、地元に眠る古文書や自治会などの団体の記録や資料、農具、機織りや養蚕の道具、古い着物など、物づくりや生活のための道具なども地域の歴史を知る手がかりになることを強調した。

慣れないつたない説明のため、国府台高校の生徒たちにどの程度理解してもらえたかははなはだ自信がないが、現在繁華街や観光地として発展している神戸にも古く長い歴史があること、その歴史を知るための貴重な資史料の保全・活用のための活動の実際が多少なりとも記憶に残り、地元に帰ったとき地域の歴史的環境や歴史文化のあり方に興味を抱いていただければと思う次第である。

（文責・人見佐知子）

Recovering Management of Arts and Cultural Heritages from Disaster Academic Forum of Urban Culture Research vol.5 17-21 January 2007, inGadjah Mada University

"Preservation of disaster affected historical materials:A report of activities of a volunteer"

▲ The Java central part Earthquake stricken area

In this article, I examined the maintenance activity of the disaster affected historical materials by a volunteer group called "The Volunteer Network for Historical Materials (VNHM for short)".VNHM was established in order to rescue the historical records which suffered damage from the Great Hanshin Earthquake in 1995. In addition, after 2004, we decided to cope with not only an earthquake but also a flood. I introduced rescue operation of flood damage historical materials by Typhoon No.23 occurred in October, 2004. "VNHM" worked on maintenance of flood damage historical materials around the northern part of Hyogo and the northern part of Kyoto that there was many of a flooded house. At the time of large-scale disaster, the local administrations were not able to protect and investigate non-designated culture assets mostly. Non-designated cultural assets were not objects of protection even if they were the things which were important for the area. We consider them as object of preservation if they can shed light on the history of a village or a town although they are not designated as cultural assets. Inhabitants of a stricken area cooperated with "VNHM", we discovered these flood damage historical materials and we were able to rescue them. These non-designated cultural assets were salvageable with a vacuum freeze dryer

installed in the archaeological property centers in Japan. The various disciplines of History, Archaeology and Cultural Properties collaborated to restore historical materials which suffered damage from disaster in Japan. I described the processes and problems encountered during the cooperated preservation activities.

(Masakazu Matsushita)

第３回　文化財の防災計画に関する研究会
「震災から美術工芸品をまもる」

2007年1月29日、東京文化財研究所において、上記の研究会が行われた。今回は美術工芸品に焦点をあてて、行政や博物館・美術館の危機管理体制や大災害発生後の文化財救援活動、災害で被災した美術工芸品の保存修復方法についての４講演が用意された。

奥村弘氏「大規模自然災害と地域歴史遺産保全活用－阪神淡路大震災から現在までの歩み－」

宇田川滋正氏「被災文化財の保存修復　歴史資料を例に」

村田忠繁氏「災害における文化財保存修復学会の対応と防災への取り組み」

本田光子「九州国立博物館の震災対策－博物館の危機管理－」

東京文化財研究所では、1995年の大震災の際に「阪神・淡路大震災被災文化財等救援委員会」の事務局を立ち上げ、救済活動を行ってきた。その成果は『美術工芸品等の防災に関する調査研究（平成７・８年度科学研究費補助金基盤研究（A）１研究成果報告書』などとしてまとめられている。文化財防災に関する調査研究活動が、今回の一連の研究会が立ち上がったことによりさらに本格化してきた点は喜ばしい限りである。

その上であえて希望を述べれば、①東文研がもつ保存修復のノウハウの提供と共有、②未指定文化財も含んだ文化財防災の法整備、③救出すべき文化財の事前調査体制づくり、など文化財防災をめぐる具体的な仕組みづくりに向けた意見交換の場を今後も提供していただければと思う。

（文責・松下正和）

第２回　人と文化遺産保存継承ミーティング
「災害直後と継続的な救済活動および災害前の活動の実際を知る」

2007年3月9日・10日、東北芸術工科大学にて、上記の会が行われた。文学部地域連携センターからは、松下正和と河野未央氏が参加した。

9日には、宮城歴史資料保全ネットワークの伊藤大介氏が「宮城歴史資料保全ネットワークの災害前活動の実際」と題して、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターの南洋一郎・本多達哉両氏が「福井県足羽川水害による罹災図書の救出活動の実際」と題して報告が行われた。また、東北芸術工科大学文化財保存修復研究センター の手代木美穂氏により「水害罹災した福井県教育庁埋蔵文化財調査センター所蔵図書の救済活動と問題点および山形文化遺産防災ネットワーク設立準備委員会の活動報告」がなされた。

伊藤報告では、2003年発生の宮城県北部地震による被災資料レスキュー活動と、その後の歴史資料所在調査の具体的な方法について紹介があった。宮城資料ネットの活動で印象的だったのは、①緊急のレスキューや通常の史料調査技術を応用した活動である「一軒型資料保全活動」を展開している点、②日常的に資料状況を把握し災害時の活動に備える「歴史資料所在調査」、③ノートPCによる現場での目録作成、調査データのデジタル化であった（なお、宮城資料ネットのウェブページでは調査の際に使用している調査用紙とデータベースシステム、調査員・訪問先への配布資料が

ダウンロードできるようになっており（http://www.cneas.tohoku.ac.jp/miyagi-shiryounet/siryo.html）、有益である）。

南・本多報告では、2004年福井水害の際に埋蔵文化財調査センター所蔵の遺物・図書・図面類が浸水した際の救出・修復活動の経緯について述べられた。被災直後はこれらの資料が泥だらけになったために水洗いしたこと、汚損資料からはカビや悪臭が発生したことなどの状況が報告された。これらの点は、歴史資料ネットワークがレスキューした2004年台風23号の水損・汚損史料と同じ状況であった。その後福井の汚損資料は恐竜博物館の冷凍庫にて保管され、後に東北芸術工科大学にて真空凍結乾燥されることとなった。

また、手代木報告では、山形史料ネット構築の準備状況が説明された。「山形県文化遺産防災ネットワーク設立準備会」事務局通信が発行されており、活動状況についてもその中で紹介していくとのことであった。

翌日は、≪乾燥と紙についてのワークショップ≫が行われた。手代木氏より「ものの「乾燥」について」と題する報告があり、真空凍結乾燥機の原理と処理の実際について説明があった。早く乾燥させるためにはチャンバー内の資料の置き方を工夫する必要があること（背表紙を上にしてななめに重ねる）、真空凍結乾燥後の資料にまだ水分が残っている場合にドラフトや扇風機にて乾燥を行う方法などの技術指導を得た。また、古本啓子研究員らによる塗工紙のフリーズドライ結果が報告され、料紙の固着がはげしく開披不能となるものが多いことが明らかにされた。台風23号の水損史料のうち洋紙のものについては一部固着展開不能なものがあり、恐らくは塗工紙のコーティング剤によるのだろう。また、塗工紙にはヨウ素デンプン反応が見られたため、デンプンがあることがわかった。またサンプル塗工紙を水損させ、カビを発生させたものから、台風23号による水損史料と同様の悪臭があったため、泥の付着による悪臭というよりも、むしろデンプン成分にカビが生えたことによる悪臭の可能性が高いことがわかった。歴史資料ネットワークも大量の乾燥済み汚損史料を保管しており、そのいずれも腐敗臭が発生している。今回の保存科学の専門家による技術指導を参考としながら、文学部地域連携センターとともに技術交流をはかり、来年度以降は臭い成分の分析と脱臭方法の研究を行うことを課題としたい。

（文責・松下正和）